

English Salonを開きました！

8月24日（土）、牧田コミュニティセンターにて「英語サロン」を開催しました。

ゲストスピーカーはアンドリュー・ハミルトン・ペースさん。アラバマ出身でケンタッキー大学から鈴鹿国際大学に編入・卒業された方です。

英語サロンは最初から最後まで英語オンリー。27名の方が参加されました。

今回のメインテーマは「豊かに生きる」ことについてでした。

SIFAでは、毎年夏に、市内の中学生・高校生を友好都市であるオハイオ州ベルフォンテン市へ派遣しています。

このプログラムを担当して、毎夏ベルフォンテンを訪れる度、人々のゆったりとした暮らしぶりに、（みなさん、心豊かに生きているなあ〜）と感心させられました。

決してお金をたくさん使っているわけではありません。お金はかけなくとも、特に週末は家族が集い、よく話をし、よく笑い、裏庭で犬と遊んだりシンプルな遊びをしたりと・・・なんだかそこに流れる時間は、日本よりもゆったりとしたものなのです。

そこで、何かとストレスの多い日本で日本人が心豊かに過ごすにはどうしたら良いだろう？アメリカ人とどこが・何が違うのだろう？といったことを、アンドリューさんとお話していたことから今回のテーマが決まりました。

まず初めに、アンドリューさんが、スクリーンで自分のバックグラウンドであるアラバマ州やケンタッキー州について、写真を見せながらお話して下さいました。町並みや家の中の様子・食事の写真などを見ながらアメリカ南部について説明を受けると、参加者のみなさんからは、早速様々な質問が飛び交いました。

<アラバマの風景>



<ケンタッキーの町並み>



Q : 「アメリカの家では、どのバスルームもトイレとお風呂が一緒になっているのですか？」

A : 「トイレだけ、洗面だけというバスルームもいくらかはありますが（これをハーフバスというそうです）が、ほとんどはお風呂が一緒になっています。また、バスルームがひとつだけ、というのは少なく、多くの家がふたつか3つのバスルームがあります。」

Q : 「暖炉は、アメリカの多くの家にあるのですか？」

A : 「はい、多くの家にあります。しかし、実際にはそれほど使っていません。」

Q : 「本物でない暖炉を置いている家もありますか？」

A : 「はい、あるにはあるが、使えない、飾りだけという家もあります。しかし、多くの家は煙突があり、暖炉の火を楽しむことができます。」

<アメリカ南部の人々>



よく狩りに出かけ、仕留めた獲物を剥製にして飾ってある家が多いそうです。

アメリカ南部のお話になった時に、南部特有の訛りの話題になりました。

Q：「南部訛りとアメリカの標準的な英語との違いについて、教えてくださいませんか？」

A：「南部では、文化・食べ物・環境・経済などが異なるだけでなく、英語も異なる面があります。

発音とイントネーションが違い、時々文法や語彙まで違うことがあります。

オーバーオールという言葉は、暖かそうで親しみやすくリラックスした響きを持ちますが、南部では標準よりももっとカジュアルです。

もうひとつ例をあげると、複数の人に対して、私達は”yall”（ヨ一）と言います。

“How is everybody?”と言う代わりに”How yall doin?”という具合です。」

Q：「お金持ちの人達も、南部のアクセントでしゃべるのですか？」

A：「はい、色々な立場の金持ちのビジネスマンでさえ、特有のアクセントで話します。

ちょうど、関西訛り（特に大阪弁）の人達と一緒にです。多くの南部の人々が、彼らのアクセントとライフスタイルに誇りを持っているのです。

Q：「黒人の英語についてはどうですか？昔、南部には黒人奴隷が居たのですよね？」

A：「はい、アクセントに関しては、アフリカ人が南部のアメリカ人と一緒に暮らしていたので、彼らは南部のアメリカ人のように話し始めました。そして、その後、アフリカ系アメリカ人の英語はより変わっていき、異なって発達していきました。現在では、若干、南部のアメリカ人の英語に類似している特徴もまだありますが、しかし、アフリカ系アメリカ人の英語はユニークです。大部分のアフリカ系アメリカ人は、彼らがどこで暮らして、国のどのパートで育ったかに関係なく、アメリカの至る所で同じユニークさを持って話されています。」

<アメリカ南部の料理>



<東海岸の小さな町の豆料理>



<ビスケットにグレイビーソース>
日本のビスケットとは違いますネ！



<コーンブレッド>
とうもろこしの粉で出来ています。



<オクラのフライ>

予定では、アンドリューさんの自己紹介を兼ねたバックグラウンドのお話は簡単に済ませ、本題のテーマ「豊かに生きるには？」のお話にうつる予定だったのですが、予想外に参加者のみなさんからの積極的な質問が多岐にわたり、話題は様々な方向へ。

Q：「ケンタッキーはNFLやNBA、MLBチームはありますか？」

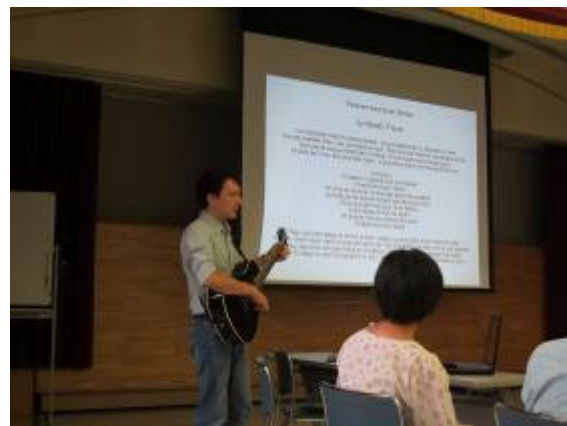
Q：「あなたは何故、日本に興味を持って、日本に来ることを決めたのですか？」などなど・・・

あつと言う間に前半が終わってしまい、10分間の休憩に入りました。

コーヒー・紅茶と軽いスナックを食べて頂きながら、休憩中もみなさん、和気あいあいと英語で会話をしてみえます。中には、ブラジル人や中国人の方もみえて、英語が話せる環境を探していたとおっしゃっていました。

後半は、アンドリューさんの歌でスタートしました。

ギターを弾きながら、Randy Travis の Forever and Ever Amen という曲を歌って下さいました♪
カントリーソングですよ～♪



Q：「カントリーミュージックとブルグラスの違いはなんですか？」

A：「それらは似ているものもありますが、ブルグラスはより特有でよりフォークスタイルです。
カントリーミュージックは、より広いジャンルの音楽です。」

そして、話題は日本とアメリカの教育の違いに至りました。

アメリカでは、小学校から高校までの勉強は比較的やさしく、大学生の方が厳しいそうです。もちろん、いくらかの大学は非常に倍率が高く、かなり勉強して成績優秀でないと入れない大学もありますが、たいていの大学は、ちょうど日本と反対で、入るのは優しく、卒業が難しいとおっしゃっていました。大学では、ある一定の学業レベルを維持しなければならず、特定レベル以下になると停学処分になるそうです。

Q：「卒業のための単位を満たすために、期間のリミットはあるのですか？たとえば10年くらいかかってよいのですか？」

A : 「それについては確かではありませんが、学科を変えたり、学期を休んだりしてから又クラスに戻ったりするなどの理由から多くの学生が卒業するのに5～6年かかっています。

しかし、いくつかの、あるいは多くの学校は、長い間留まることに対して規則があるかもしれません。お金もかかりますし・・・その前にドロップアウトになる場合もありますね。」

Q ; 「日本や外国でも多くがそうですが、学生は外国語として英語を学習します。アメリカなど英語が公用語の国は、外国語は何を学ぶのですか？」

A : 「ほとんどの高校のカリキュラムは、少なくとも2年は外国語の履修をします。

中規模～大規模な学校は、スペイン語、フランス語、ドイツ語、ラテン語を提供し、中には中学から履修して計5年間学べる所もあるそうです。小さな学校だと、スペイン語だけになります。ある地域では、他の言語が履修できる場合もあるようで、カリフォルニアの学生は日本語をとったと聞いたことがあります。

・・・ここにすべてを書き切れませんが、他にも質問は相次ぎました。

このように、参加者のみなさんからの質問が多岐にわたり、時間を30分延長したのですが、本題に至るところまでいきませんでした！

最後に参加者の方から、今日のタイトル「To live a full life」とはどういう意味ですか？と質問があり、それは、決して金銭的なことではなく、豊かに生きる、ということ。強いて言えば「心豊かに生きる。」という意味だと説明がありました。

そこで、最後にアンドリューさんに、以下の質問を投げかけてみました。

Q : 「日本のような狭い土地で、社会的にもプレッシャーが多く、窮屈な社会で、日本人はどうしたら心豊かに生きられるでしょうか？」

A : 「それは本当に難しい質問です。しかしあえて答えるとすれば、例えばファミリー。多くのアメリカ人にとって、ファミリーや親友との良い関係は、お金や物より貴重です。

プライベートな時間は、ファミリーと何かを一緒にして過ごすのが好きです。この時間を捻出するために、一部のアメリカ人は、仕事の時間や余分のお金も犠牲にします。しかしこれば長い目で見れば、彼らが人生を振り返った時、それらの記憶は、働いたり、より多くのお金を稼いだりした記憶より重要です。

また、このように窮屈なライフスタイルの中でしたら、私は、人生においてシンプルなものに、より時間とお金をかけようと思います。より多くのお金やより素晴らしい家と車・・・そういったものために奮闘することは、私の人生から多くのものを奪い去り、又、ストレスを加えます。

もし、その時間・お金そして努力をファミリーとの時間、個人の時間、趣味、楽しい経験、リラックスできる時間などに捧げるならば、より人生を楽しめるのではないかと思います。」

今回は、参加者の皆さんの英語のレベルもまちまちで、積極的にお話をされる方、アンドリューさんの話はほとんど理解できるけれども、発言するには勇気が要った方、聞いているだけで勉強になりました、とおっしゃる方、いろいろでした。

最初、予定した話の半分しか出来ませんでした。国際理解講座としては面白い試みだったと思います。今後どのようにしていくべきか、課題はたくさんありますが、また検討したいと思います。